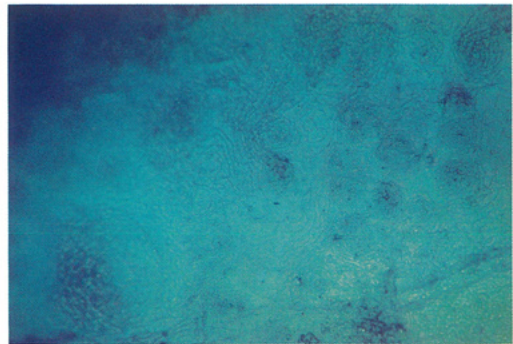




1 御冠残欠ノ内 真珠類聚 北倉157



3 巻貝産真珠表面拡大写真 (×200)



2 二枚貝産真珠表面拡大写真 (×100)

1 礼服御冠残欠のうち真珠類聚〔北倉一五七〕

真珠玉が一番多く残されている宝物は、聖武天皇、光明皇后が大仏開眼会に使用されたという御冠残欠に属するものである。ただしこれらは、仁治三年（一二四二）三月、後嵯峨天皇の即位式に使用される冠の手本とするため出蔵され、還納の途上破損してしまつて、その原型さえ留めない状態となつてしまつた。これらがそのまま一括宝庫に保存されたものである。

このうち真珠は総数三千八百数十箇を数える。そのうちの一部を写真に示した。

右方のものは旧連結のままで、大小の真珠と所々紺・緑・黄・赤の瑠璃玉を交えた垂飾。これは天皇の冕冠の垂飾とみられる。下方のものは、中間に珊瑚の管玉が混じる。左方のものは旧連結が解け、散失するのを恐れて明治期に集め纏められたものの一部である。

（木村法光）

（撮影 山中五郎）

2 二枚貝から採れたと同定された真珠層真珠の表面〔北倉一五七〕

礼服御冠残欠中に保管されている真珠（散珠）で、二枚貝産殻体真珠構造に特有の条線模様が認められる。条線模様からは海水産二枚貝か淡水産二枚貝かの正確な同定は不可能であるが、機器分析の結果とあわせてアコヤガイ産真珠と推測される。（和田浩爾・赤松 蔚）

（撮影 松田泰典）

3 巻貝から採れたと同定された真珠層真珠の表面〔北倉一五七〕

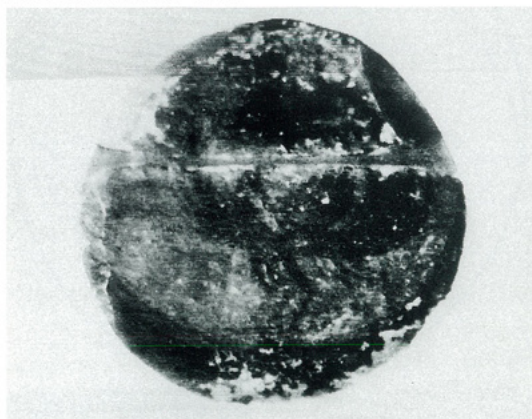
礼服御冠残欠中に保管されている真珠の中で最も大きい散珠3個の中の1個。扁平、円形で片孔が明けられている。アワビ真珠特有の光沢を示し、顕微鏡観察の結果、表面にピラミッド成長丘あるいは大きなアロックスの集合からなる巻貝殻体真珠の特徴を示すことからアワビ産真珠と推測される。

（和田浩爾・赤松 蔚）

（撮影 松田泰典）



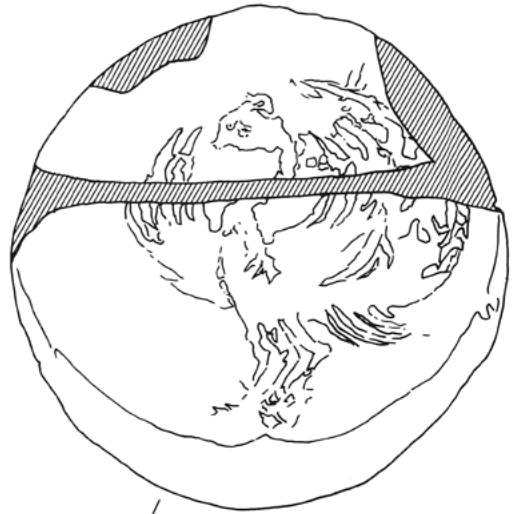
南倉125-1桑木阮威 斜姿



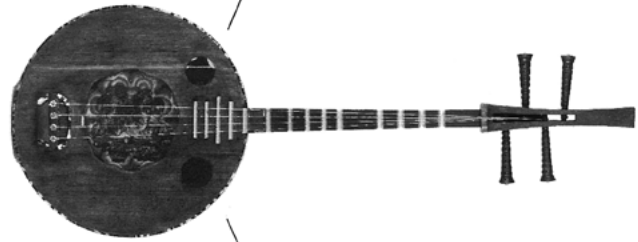
同上満月部反射赤外線画像（鳳凰）



同上満月部反射赤外線画像（蛙と兎）



満月部書き起こし図（鳳凰）  
（斜線部は後補）



満月部書き起こし図（蛙と兎）

桑木阮咸の満月部画像（南倉一二五―一）

桑木阮咸（南倉一二五―一）は、革製の捍撥に樹下冊碁図が描かれることで知られている。しかし、捍撥の上にある満月形二箇は同じく革製で緑青を塗るが、現在肉眼では真黒にしかみえない。

平成二年十二月にその満月形を赤外線テレビ装置を通して観察したところ、前頁の写真及び右の描き起こし図に示した様に、一方に翼を広げた三本足の鳳凰、もう一方に中央の木を挟み、左に蛙、右には兎木の根元に白が描かれていることが判明した。また、双方の満月形に琵琶の響孔に擬した三日月形が描かれていることも確認した。

このような図像は日月を象徴するもので、「楚辞」や「淮南子」などによると、日中には三本足の鳥、月中には蟾蜍（ヒキガエル）・兎・嫦娥（仙女）などが棲み、桂樹が生えたとされる。しかし、実際に表

現されている図像は時代や地域により異なることがある。例えば、今回発見の図像のように鳥が鳳凰に変化しているものや、鳥の足が二本のもの、白が壺に変わっているものなどがあり、また図像の取り合わせや構図も様々である。

日月像は中国では前漢代から馬王堆の彩絵帛画をはじめ数多くの考古資料に登場し、わが国でも飛鳥時代の玉虫厨子や天寿国繡帳あるいは平安・鎌倉時代の仏画などに見える。ちなみにこの阮咸の日月像に類似した表現は六〜十世紀の考古資料に見え、特に敦煌発見の仏画、高句麗古墳壁画には酷似するものがある。

このように、今回の発見は同阮咸の性格を考える上での資料のみならず、絵画史の新たな研究資料を提供するものと言える。

（西川明彦）